

ベルギーの奇才ヤン・ファール、
現代美術史に大きな足跡を残したアンディ・ウォーホル、
コンテンポラリーダンスの最先端に行く振付家ウィリアム・フォーサイス
そして、たったひとりの出演者イヴァナ・ヨゼク、4人のアーティストの魂が呼応する。

ヤン・ファール 「死の天使」

2008年2月16日(土) 19:00 開演、17日(日)14:00 開演
山口情報芸術センター スタジオ A



構成・演出・テキスト：ヤン・ファール
出演：イヴァナ・ヨゼク

振付：ヤン・ファール、イヴァナ・ヨゼク
映像出演：ウィリアム・フォーサイス

主催：財団法人山口市文化振興財団
助成：平成19年度文化庁芸術拠点形成事業
後援：ベルギー大使館、ベルギーフランドル交流センター
企画制作：山口情報芸術センター(YCAM)

山口情報芸術センターでは、前衛美術家、演劇人、振付家、戯曲家と多才な活動を続けるヤン・ファールによる公演「死の天使」を行います。これは、1960年代アメリカのポップアートの旗手アンディ・ウォーホルが男性撲滅協会を名乗る銃撃された事件を導入に、映像と一人の女性ダンサーとの対話により、死や孤独といった普遍的な問題を浮き上がらせた作品です。

■ジャンルを横断し、多才な活動を続けるヤン・ファールの舞台作品を中国・九州地方で初紹介！

ヤン・ファールは、美術、演劇、ダンスと、多様なジャンルで作品を発表し、世界中で高い評価を得ています。「死」や「沈黙」に正面から対峙し、恐怖感や殺気を美しく、また生々しく見せる数少ないアーティストで、数々の国際的な美術展や、演劇祭で紹介されています。曾祖父である著名な昆虫学者ジャン＝アンリ・ファール(「ファール昆虫記」著者)の影響も見られ、甲虫類でオブジェや建物を埋め尽くすインスタレーションなどの美術作品は、日本でも幅広く知られています。また、舞台作品としては、近年、ダンス「主役の男が女であるとき」(2006年)や、演劇「わたしは血」(2007年)をの来日公演を行い、話題となりました。本作「死の天使」は、自身のテキスト「死の天使－男か女か、あるいは両性具有者のためのモノログ」を元に舞台化。四方の巨大スクリーンに投影されたビデオ・インスタレーションの中央にステージを作り、女性ダンサーを一人だけ登場させた100席限定の舞台作品を作り上げました。

■コンテンポラリーダンスの先端を行くウィリアム・フォーサイスと、今は亡きアンディ・ウォーホル。ヤン・ファールが見いだした2人の共通点は…。

若手ダンサー、イヴァナ・ヨゼクとともに、時代を、性別を交差しながら、「死」、「孤独」といった普遍の問題をテーマに繰り広げます。

この作品には、4人のアーティストが深く関わっています。

ヤン・ファールは、現代美術史に大きな足跡を残したアンディ・ウォーホルに深く興味を持ち、コンテンポラリーダンスを語るには欠かせない存在のウィリアム・フォーサイスとの間に共通する要素、そして顔かたちまで似ていることを見出しました。二人の内にある彼を惹きつけて止まない“変容”と“曖昧な性”の美しさ。さらに“アート”と“アーティスト”という二重の主体。さらにその二重の主体は、一方でアーティストとして有名になりたいと夢見て、また他方では無名のまま孤独に創造することを夢見ています。

ヤン・ファールは、ウィリアム・フォーサイス、アンディ・ウォーホルの“精神”を紡ぎだし、舞台中央にいる唯一の出演者(ダンサー)、イヴァナ・ヨゼクを介して、舞台上で出会わせません。

スクリーンの中からイヴァナ・ヨゼクに語りかけるウィリアム・フォーサイス。前者が悪魔、後者が天使。誰もが避けられない「死」にどう向き合うのか。「孤独」を自身にどう取り込むのか。現代における芸術表現の分野で歴史を刻むアーティスト3人と、若手ダンサーによる注目の作品です。

今回の上演は、ヨッシー・ヴィーラー演出「四谷怪談」(2005年)、ミハエル・タールハイマー演出のドイツ座「エミリア・ガロッチィ」(2006年)、ロベール・ルパージュ作・演出「アンデルセン・プロジェクト」(2006年)、そしてヨン・フォッセ作/アントワヌ・コーベ演出・照明「死のバリエーション」(2007年)に続く、同時代の世界的な戯曲家・演出家・振付家による舞台作品を紹介するシリーズ第5回目になります。

なおヤン・ファール本人が、公演当日、山口情報芸術センターに来館します。ジャンルを横断し、世界の先端で活躍するアーティスト ヤン・ファールの作品を、どうぞこの機会にご紹介いただきます様よろしくお願ひ申し上げます。

【アーティストプロフィール】

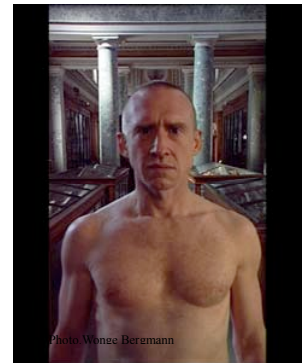
ヤン・ファールブル

1958年ベルギー生まれ。パフォーマンス・アーティスト、演劇やオペラの演出家、振付家、作家、ビジュアル・アーティストとして作品を生み出し続ける、現代における最も革新的かつ多才なアーティストの一人。主なパフォーマンス作品に、ヴェネチア・ビエンナーレで発表された「劇的狂気の力」(1984年)、オペラ「タンホイザー」(2004年)など。昨年度のダンス公演「主役の男が女である時」、演劇公演「わたしは血」の来日公演は、大きな話題を集めた。



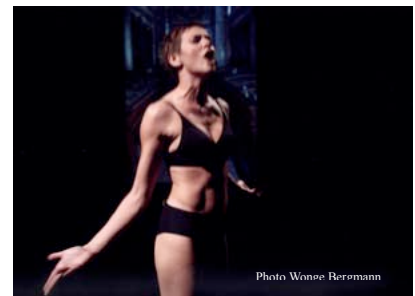
ウィリアム・フォーサイス

1949年ニューヨーク生まれ。モダン・バレエを解体し、再構築し、現代におけるコンテンポラリーダンスを牽引する最も重要な振付家の一人。1984年、ドイツのフランクフルト・バレエ団の芸術監督に就任。ダンサーのシルエットを強調した「Artifact」(1984年)、パリ・オペラ座バレエ団の委嘱作品でシルヴィ・ギエムに振り付けた「in the middle somewhat elevated」(1987年)などの大作をつくりあげ、3年でフランクフルト・バレエ団を世界に知らしめた。2002年、フランクフルト・バレエ団解散後、自身のザ・フォーサイス・カンパニーとして活動を続けている。



イヴァナ・ヨゼク

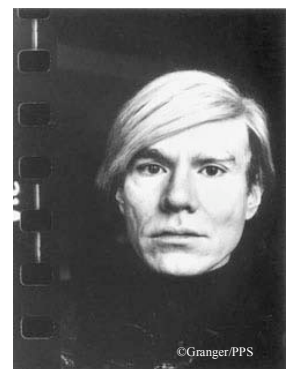
1975年、クロアチアのザグレブ生まれ。ロンドン・コンテンポラリー・ダンス・スクールにて、1993年より1997年までダンスを学ぶ。卒業後すぐにロンドンでいくつかのインデペンデント企画に参加し、マイケル・リュグ、スニエジャナ・プレムス、サラ・ファイなどと活動。ヤン・ファールブルとは2002年に活動を始め、2003年に「わたしは血」、2004年に「叫ぶ身体-The Crying Body」に出演。2003年にはアヴィニヨン・フェスティバルの委嘱により、ヤン・ファールブルが彼女のためのソロ作品「死の天使」を創作。「L'Histoire des larmes」(2005年)にも出演している。



アンディ・ウォーホル

1928年アメリカ・ペンシルバニア州生まれ。1987年没。1960年代に誕生したポップアートの旗手。1950年代広告を中心とした商業デザイナーとして活躍した後、1960年よりファインアートの世界に移る。アメリカのキャンベルスープやマリリン・モンローをモチーフにシルクスクリーンで同じ絵柄を大量生産する作品を発表。ポップアートの中心的存在となる。アメリカンカルチャーや商業的象徴となるものを多く題材に使用し、民主主義社会の平等性を表し、アメリカの文化アイデンティティを表象化した。

1963年よりニューヨークに“ファクトリー”という制作スタジオを作り、ローリングストーンズのミックジャガーをはじめとした名だたるアーティストの集まる場となった。また、ルー・リードのロックバンド“ヴェルヴェット・アンダーグラウンド”のプロデュースをしたことも広く知られている。



[概要]

ヤン・ファールブル「死の天使」

構成・演出・テキスト：ヤン・ファールブル
振付：ヤン・ファールブル、イヴァナ・ヨゼク
出演：イヴァナ・ヨゼク
映像出演：ウィリアム・フォーサイス

日時：2008年2月16日(土)19:00開演、17日(日)14:00開演 (30分前開場)
※公演終了後、ヤン・ファールブルによるポストトークを行います。

会場：山口情報芸術センター スタジオ A

料金：全席自由 一般 2,000円 any 会員/特別割引 1,800円
当日一律 2,300円

チケット情報: インターネット <http://www.ycfcp.or.jp/> (24時間受付) ※要事前登録
電話/窓口 山口市文化振興財団チケットインフォメーション(YCAM内)
TEL.083-920-6111
※10:00~19:00(火曜及び12月29日~1月3日休館)

■ヤン・ファールブルへのご取材をご希望の際は、下記までご連絡ください。

お問い合わせ:山口情報芸術センター：岸、四元(よつもと)
〒753-0075 山口県山口市巾着町 7-7
TEL: 083-901-2222 FAX: 083-901-2216
E-mail:information@ycam.jp
<http://www.ycam.jp/>

■特別割引について

特別割引は、青少年(18歳未満)、シニア(65歳以上)、障がい者及び同行の介護者1名が対象。
未就学児入場不可。

■託児サービス

対象：0才(6ヶ月)以上

託児時間：開演の30分前から終演後30分後まで

料金：お子様1人につき500円、2人目以降は1人につき300円

申込方法：2月9日(土)までに上記チケットインフォメーションまでお申し込みください。

■車椅子席 事前にお問い合わせください。

<山口情報芸術センター(YCAM)へのアクセス>

■JR新山口駅から

- ・JR山口線湯田温泉駅下車、徒歩25分/タクシー5分
- ・JR山口線山口駅下車、徒歩25分/バス10分(巾着町か済生会病院前下車)/タクシー5分
- ・防長バス30分、巾着町下車

■自動車利用

- ・山陽自動車道で防府東ICから約30分
- ・九州・中国自動車道で小郡ICから25分

ヤン・ファールブル「死の天使」 劇評

(2004年アヴィニヨン演劇祭初演)



AVIGNON

DANSE « L'ANGE DE LA MORT » de Jan Fabre

Multiperformance

La critique de René Sirvin

JAN FABRE aime les femmes à la beauté et au tempérament hors du commun. Après Erna Omarsdottir en Avignon en 2000, et Lisbeth Grutvez en avril 2004 aux Abbesses, le plasticien et homme de théâtre nous révèle une troisième créature de rêve : Ivana Jozic, interprète de *L'Ange de la mort* qu'elle a chorégraphié avec lui. Un spectacle qui sort évidemment des sentiers battus. Le cadre déjà n'est pas ordinaire : dans la chapelle du lycée Saint-Joseph, le public passe derrière un rideau noir pour se retrouver dans une haute mais petite pièce. Au centre, sur une estrade d'à peine plus d'un mètre carré, git, le visage contre le sol, une longue et superbe femme en sous-vêtements noirs. Sur les quatre murs se détache l'immanse photo en couleurs de vitrines alignées de chaque côté d'une allée centrale au Musée d'anatomie de Montpellier. Les spectateurs, assis sur

des coussins à même le sol, entourent Ivana Jozic comme une marée humaine. Un son mystérieux s'élève et l'on distingue dans la pénombre le compositeur Eric Sleichan jouant de son saxophone comme d'une percussion qu'il frappe d'une main gantée d'une chaussette. Une musique d'ambiance spatiale, le musicien rasant les murs pendant le spectacle.

La femme se soulève et devient larve, halète et rugit en écho avec le musicien qu'elle suit du regard, puis se redresse toutes griffes dehors et orbule sur ses jambes parfaites avec une souplesse animale. Étonnamment expressive, Ivana Jozic passe tour à tour de la créature diabolique à la vamp sensuelle, Ange de la Mort que l'on suivrait dans l'autre monde captivé par sa férocité.

C'est alors que William Forsythe fait son entrée en slip, sur un écran d'abord, puis sur les trois autres, filmé au musée de Montpellier, énonçant avec une naturelle simplicité les questions métaphysiques posées par Jan Fabre.

Un étrange dialogue s'établit entre la danseuse et Forsythe. Il s'exprime en anglais (traduit en surtitres) et tous deux disent parfois ensemble le même texte. Les plans de Forsythe diffèrent souvent d'un écran à l'autre : le danseur se dédouble et disparaît pour réapparaître d'un côté ou d'un autre.

Jan Fabre ne serait pas Jan Fabre s'il ne superposait sur les images de Forsythe celles - inquiétantes et dérangeantes - de squelettes, de cerveaux, de têtes momifiées, de monstrueux bébés siamois conservés en bocaux avec mille autres curiosités anatomiques du même anachorète au Musée de Montpellier. L'ensemble crée un climat surréaliste où vie et mort se côtoient tandis que la fellue Ivana Jozic se déchaine sur son podium. Le public retient son souffle, subjugué par des artistes, des images et une mise en espace qui resteront longtemps gravés dans les mémoires.

Avignon : chapelle du lycée Saint-Joseph, à 15 h et 20 h, les 14, 15 et 16 juillet.

アヴィニョンより

ダンス：ヤン・ファーブル「死の天使」

マルチパフォーマンス

評：ルネ・シルヴァン

ヤン・ファーブルは美しく、並外れた気質の女性が好きである。2000年のアヴィニョンにおけるエルナ・オマルストティール、2004年のアベスにおけるリズベット・グルウェーズに続き、この美術家兼演出家は、私たちに、三番目の夢の被造物を見せてくれた。「死の天使」においてファーブルの振付で踊るイヴァナ・ヨゼクである。この作品はまったく常識外れだ。舞台のつくりからして普通ではない。観客が、サン・ジョゼフ高校のチャペルの中を通り、暗幕の裏側に出てみると、高くなった小さな空間に出る。中央には、1メートル四方そこそこの壇上に、顔を伏せた、長身で美しい、黒の下着姿の女性が横たわっている。4つの壁には、モンペリエの解剖博物館中央通路の両側に並んだ陳列ケースを写した巨大なカラー写真が浮かび上がっている。

地面に直接置かれたクッションに座った観客はイヴァナ・ヨゼクを人間の海のように取り囲む。ミステリアスな音が響き始め、薄明かりの中、サキソフォンを演奏する作曲家エリック・シュライヒムの姿が見えてくる。靴下を手袋にし、打楽器のようにサクスを叩いている！音楽家たちは上演中、壁をこすり、宇宙空間のような雰囲気音楽を奏で続ける。

ダンサーは立ち上がり、猛獣になり、息を切らせ、視線の先の音楽家とともにくりかえし吠える。そしてあらゆる爪を外に向けて立て、完璧な美しさを持つ脚を使い、獣のしなやかさで体を波打たせる。驚くべき表現力でイヴァナ・ヨゼクは魔性の被造物と官能の妖婦の間を行き来する。観客はその女性の魔力に捕らえられ、向こう側の世界へと「死の天使」を追いかけることになるのだ。

その時、下着だけを身につけたウィリアム・フォーサイスがモンペリエの博物館を撮ったスクリーンの中へ入ってくる。まず一つの画面、次いで他の三つ。フォーサイスはヤン・ファーブルによって考えられた形而上学的問題を淡々と述べている。奇妙な会話がダンサーとフォーサイスの間に行われる。フォーサイスは英語で話し（字幕翻訳付）、時に二人は同じテキストを一緒にしゃべる。フォーサイスの出ている四つの画面はしばしばずれを見せる。フォーサイスの姿は時に二重になり、時に画面から消え、同じ、あるいは違う側から再び現れる。

ヤン・ファーブルはまさに彼らしく、フォーサイスの映像に、不気味で不安にさせるような映像を重ねる。骸骨、脳、ミイラ化した頭部、恐ろしいシャム双生児。それらはモンペリエの博物館で、他の同じような解剖学上の珍しい標本とともに保存されている。すべてのものが、生と死が隣り合うシュルレアリスム的な空気を生む中、ネコ科の動物イヴァナ・ヨゼクが舞台上で狂乱する。観衆は息をのみ、その記憶に長く刻み込まれるであろうアーティストと映像と空間演出に心を奪われるだろう。

AVIGNON • « L'Ange de la mort » est un hommage à Andy Warhol et à William Forsythe

La réverie macabre du chorégraphe Jan Fabre

AVIGNON. Le trio infernal, entre réel et virtuel, est en place, le texte, monologue pour un homme, une femme ou un être intermédiaire, signé Jan Fabre, est un hommage à Andy Warhol et à William Forsythe qui poussent, selon le planard Jules Kopp, à leur limite, les images de scène à quatre mètres carrés posé au centre de la chapelle Saint-Joseph. Le jour, le vide, le noir dans une mise en scène d'Andy Warhol, Fabre, offre renvoie de spectateurs assis sur des sous-sols lumineux. Effets d'unicité de composition, nécessaires pour éviter ce piège tout à la performance.

Sur les quatre murs, quatre écrans vidéo monumentaux curieux comme des panoramas de peintures formant un carré et transmettent l'atmosphère insalubre de Musée d'Anatomie de Montpellier. La silhouette en slip blanc du chorégraphe William Forsythe, auquel la production est dédiée, y apparaît au cas de confidences sur la mort, la vie d'artiste, le glivé et le pöhlé, le réactif de la chair. Inspirées par le peintre Jan Van Eyck, les images semblent parfois émaner du plafond au sol pendant qu'un musicien saxophoniste (Stef Sleichem) glisse en un spectre le long des parois.

Le trio infernal, entre réel et virtuel, est en place, le texte, monologue pour un homme, une femme ou un être intermédiaire, signé Jan Fabre, est un hommage à Andy Warhol et à William Forsythe qui poussent, selon le planard Jules Kopp, à leur limite, les images de scène à quatre mètres carrés posé au centre de la chapelle Saint-Joseph. Le jour, le vide, le noir dans une mise en scène d'Andy Warhol, Fabre, offre renvoie de spectateurs assis sur des sous-sols lumineux. Effets d'unicité de composition, nécessaires pour éviter ce piège tout à la performance.

« C'est le titre qui révèle la femme en grant et perdrait sèchement son sexe. Elle réagit comme s'il la touchait la torturait où la faisait jouir, on ne sait. Ses ongles se crispent, ses doigts se forment. Elle râle, gousse, souffle, se charge en morceaux de chair vibrante. Elle est un ange noir, la parole diabolique pour ce qui s'elle regardait sur les écrans et qui respirent de la mort pour mieux parler de la Vie. Elle se contorsionne pendant que le visage de Forsythe se fait et surimpression dans l'image d'un être. Une fois de plus, Jan Fabre, dans la tradition de certains peintres du XVII^e siècle, met en scène une vanité d'une redoutable ambivalence.

Fascination et terreur devant la vie, le corps, la matière neurent serré les tensions nerveuses de ce spectacle qui avance au bord de l'horreur. En montrant des images de corps difformes et de monstres à cette humaine conservés dans les boyaux du Musée d'anatomie, Jan Fabre amplifie sa réverie sur la mort qui fait trembler en maintenant sylvie. Son Ange de la mort est une danse macabre rudement vivante, presque drôle dans sa rage de mordre la où la disque de faire mal. Tout s'y joue dans un même mouvement : la beauté et la laideur, le plaisir et la souffrance, le masculin et le féminin. Fabre a beau mettre

en jeu des artifices affolants et toute la vigueur de son incroyable intelligence, l'éclaircit de l'humain reste insoutenable. Pas l'ombre d'une piste pour en cerner l'origine, ni le sens. Seule sa beauté, sa puissance, aussi dernière soit-elle devant la mort, demeure. Jan Fabre, qui sera l'artiste-associé du Festival d'Avignon 2003, en fait une fois de plus, avec *L'Ange de la mort*, une étonnante, non dérangeante.

Rosita Boisseau

L'Ange de la mort, de Jan Fabre. Chapelle du lycée Saint-Joseph. 18 heures et 18 heures, jusqu'au 16 juillet.

« La danseuse Ivana Jovic, sur une scène de 4 m², joue « L'Ange de la mort » devant une vidéo où apparaît le chorégraphe William Forsythe, à qui le spectacle est dédié. Le spectacle 15/07/04



アヴィニョンより

『死の天使』はアンディ・ウォーホルとウィリアム・フォーサイスへのオマージュである。

「振付家ヤン・ファールルの死の夢想」

アヴィニョン・特派員レポート

評・ロジータ・ボワソー

近ければ近いほどいい。官能的であるほど、生硬なものになる。黒の下着だけを身にまとったイヴァナ・ヨゼクの筋肉、その匂い、汗、唾によって。サン・ジョゼフ教会の中央に置かれた4m2ほどの台の上で、女神イヴァナがフラマン人ヤン・ファールルの演出で『死の天使』を演じる。百人ほどの観客はクッションの上に座り彼女を取り囲む。距離の近さや圧迫感が、パフォーマンスを正面から受け取るための効果を生んでいる。

四方の壁には、絵画のパネルを思わせる巨大なビデオ画面が正方形に浮かび上がり、モンペリエの解剖博物館の異様な雰囲気を与えている。この作品が捧げられている振付家ウィリアム・フォーサイスの白い下着姿のシルエットが、死や芸術家の生活、私生活と観客、肉体の虚無についてのささやきとともに画面の中に現れる。ヤン・ファン・エイクの絵からヒントを得た映像は、サクソ奏者（エリック・シュライヒム）が仕切り壁に沿って幽霊のごとく滑るよう移動する間に、時おり天井から地面へと墜落するかに見える。

現実とヴァーチャルの間に、地獄の三角関係が結ばれる。男、女あるいは両性具有者のモノローグのためのヤン・ファールルによるテキストは、アンディ・ウォーホルとウィリアム・フォーサイスへのオマージュである。この二人は、フランドル人ファールルによれば、いくつかの共通点があるということだ。容赦のない、アイデンティティに関わるこの冒険的な作品の言葉は舞台上を歩き交い、英語とフランス語として反響し、登場するものの間に錯綜した関係をつくりあげる。

拷問あるいは歓喜

サクソフォンを冷淡に叩き、ダンサーの耳をひっかいて目覚めさせるのはミュージシャンである。ダンサーはまるで音楽家が彼女に触れ、責め立て、歓喜に導くか何かするように反応する。足の指は痙攣し、手の指はねじ曲がる。彼女は喘ぎ、くすくす笑い、口笛を吹き、振動する肉片へと変身する。彼女は黒い天使であり、彼女がスクリーン上に見つめている、生を語るために死から戻った人間のための悪魔の言葉だ。フォーサイスの顔が頭蓋骨の映像とオーバーラップして混じり合う間中、彼女は身をよじらせる。

ヤン・ファールルはまたしても、何人かの17世紀の画家にならい、おそろべき両義性のむなしさを演出する。

生、身体、物質を前にした魅惑と恐怖が、恐ろしさの縁を進むこのスペクタクルの神経質な緊張感を固く結わえつける。解剖博物館のガラス瓶に保存された、奇形の身体や人間の頭を持った怪物の映像を流し、ヤン・ファールルは、今そこで目覚めている者を震撼させる死についての夢想を膨らませる。彼の「死の天使」はまさに生きたままの死の舞踊であり、それは痛みを与えかねない場所に噛みつくような怒りの中であってほとんど奇妙なものでさえある。

すべては同じ動きの中で演じられる。美しさと醜さ、喜びと痛み、男と女。ファールルがおそろしい奸計や、信じがたい知力を働かそうとも、人間の謎は残されている。その起源や意味をはっきりさせようなどという形跡は見当たらない。ただ人間の美しさと力、そして取るに足りなさ、死を前にしてそこにあるのだ。ヤン・ファールルは再び、見る者を打ちのめす『死の天使』を持って、2005年のアヴィニョン演劇祭に参加するだろう。

写真：ダンサーのイヴァナ・ヨゼク。4m2の舞台上で『死の天使』を踊る。後方はこの作品が捧げられている振付家のウィリアム・フォーサイスが登場するビデオ。